

りませんでした。草の根、葉、木の皮、何でも飯盒に入れて煮て食べたこと、よく生きて日本に帰って来たことなど、思い出は尽きません。いかに食べ物、食料が大切であるかということをもっと体験しました。

シベリア抑留記

和歌山県 織本 清

昭和二十年五月十日、綴芬河にいたが、現地召集となり、入隊後一か月もしないうちに、延吉へ衛生兵教育隊があるから行くように命令が出て、転属し、間もなく終戦を迎えた。

初年兵でもあることから何もすることもなく、気楽に構えて過ごしていた。延吉のいか所を集められた。千人くらい集まっていたと思うが、そこで兵舎跡の収容所へ収容された。

十月になって「日本に帰る」とのことで、身軽な姿にさせられて行軍することになった。どこまで行くのか、

腹がすいても小休止もなく、銃に囲まれながらの行軍が続いた。十日間くらい歩かされたと思う。

無蓋貨車に乗せられ、鍵をかけられ、夕方ともなると寒さが身にこたえる。どのくらいの時間を経たろうか。毛布から顔を出してみると、北の暁で灰色の空が見える。貨車がとまった。明らかにソ連領のそれとわかる四囲の荒廃たる風景である。

寒風吹き荒れる丸太小屋、コーリャン、粟、時には大豆粕やえん麦が主食、水で薄めたようなスープが飯盒のふたに一杯（少々の岩塩で味つけ）の食糧、何もしなくても飢死するのが当たり前の、まさに生死限界の生活環境である。

作業は原生林の山から山への伐採作業、ノルマ制である。倒れた者のノルマが残留者に加えられる作業量で、極寒の夜中もたたき起こされて作業が強制される。

伐採ときは身の危険も忘れて、木の苔や木クラゲ、茸類をあさっては、飯盒に入れスープの足にする。松葉の酒もつくって飲む。栄養失調者や鳥目、怪我人が日増しにその数を増すという状況である。倒れた戦友の看護

も許されない強制作業は、まさにこの世の地獄図絵そのものであった。

二十二年ころからは、食糧事情も定量配給となり、ノルマの達成も一〇〇%を超すようになってきたので、食糧配給がその分余計となるようすとなった。ソ連人の労働能力も、余り良いとはお世辞にも言えたものではなかった。

日本新聞で収容所の洗脳教育も行われたが、一日も早い祖国生還が本音なので、形式的にだけ賛成の態度をとった。一旦ダモイ組としてナホトカまでは行ったが、待機者が多いとの理由で、また他の原始林伐採に行かされた話も聞いたので、ソ連人の言葉を一応疑ってみるようになっていたが、日の丸を掲げた船のタラップを登り切ったときは、ほんとうにホットした気持ちだった。みんな泣いて喜び合った。

二十三年十一月舞鶴港に入港して、抑留を終わった。

銃殺刑から生還

広島県 平 本 直 行

聞き手（木村茂久男） 平本さんどうも、ご苦勞をかけます。年末で忙しいのに大変恐縮しています。慰霊祭なんかの段取りでいろいろあって、結局、聞き取り調査も、うちが一番しまいになろうと思うんです。あなたは特に、シベリア抑留中には、非常に悲惨な目に遭われたということをお聞いしておるんで、これからひとつ伺いますので、ひとつよろしくご協力をお願いいたします。終戦時はあなたはどこにおられましたか。

平本 関東軍司令部。

聞き手 関東軍司令部。それから。

平本 それから、終戦になって、原隊へ復帰しました。野戦工廠の第二十六連隊へ帰ったわけです。それから、公主嶺へ集結。公主嶺から黒河へ向かって、一番の最初の出発ですね。ソ連抑留の第一歩を我々が、九月の